◆東面大垣(東院地区)の調査―第286次

はじめに　宇奈多理神社上水道工事にともなう事前調査。調査地は、東院東南部と東面大垣の２ヶ所だが、前者は遺構の残りが悪いのでここでは省略する。面積は77.5㎡、期間は９月８日～12日。

検出した遺構と出土遺物　南北に長い調査区のほぼ中央に幅５㎝程度の灰白粘土が筋状に残る。周辺における従来の調査結果から、位置的にみてこれは東面大垣SA5900の築地堰板痕跡と考えられる。堰板痕跡の断面は若干東面大垣築地心々側（東側）に傾く。部分的に認められる幅の変化、屈曲、底面レベルの違いは、堰板単位を反映しているものと推定される。

堰板痕跡を挟んでその東西の土層はほぼ平行に縞状をなし、その下層は調査区内東西端まで一連の土層で、上層より単位の厚い縞状土層であった。本調査区は幅が狭いうえ、地山を確認することができなかったので断言はできないが、従来の調査結果からみて、東側が築地本体、西側は犬走り築成土、下層は掘込地業内にあたるものと思われる。

SS16303はSA5900の西側に沿って検出したピット群である。本調査区のすぐ南側にあたる第245-2次調査（平成５年度）でも同様の柱穴列を検出しており、一連のものと考えられる。調査区が狭いためか、掘形ははっきりしなかった。間隔はふぞろいであるが、位置的にみて築地添柱もしくは寄柱の可能性がある。

遺物は掘込地業内から軒丸瓦6314Ａ、6308Ｂ型式、塼各１点を含め、瓦塼類計35点が出土した。

まとめ　本調査では、堰板痕跡などを検出し、東面大垣の築造方法を知る手がかりを得た。また、掘込地業から出土した軒丸瓦は平城宮軒瓦編年Ⅱ-２期にあたり、東面大垣がつくられた年代の上限を示す資料として注目すべきものである。

（清野孝之）

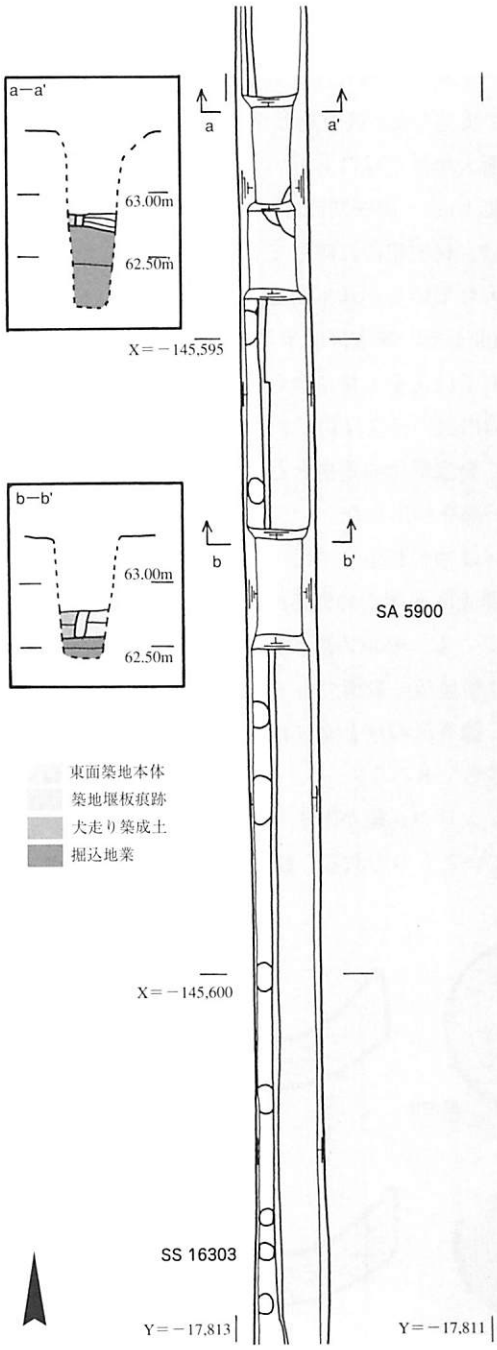

図42　第286次調査　遺構平面図　1：60